

児童のキャリア成熟に関する要因分析

竹内 登規夫 (愛知教育大学)

○坂 柳 恒 夫 (大阪教育大学)

分析する。

＜はじめに＞

進路指導の中心的課題は、個人のキャリア発達の指導・援助であるといわれる。キャリア発達 (Career Development) とは、個人の労働に関連した行動の生涯にわたる系列とパターンを示し、職業につく前後の労働に関連した経験や活動のすべてを含むものである (Krohl)。

このキャリア発達の程度をとらえる測定概念として、キャリア成熟 (Career Maturity) が考案されている。キャリア成熟は、キャリア発達のライン上で到達した位置を示すために使用される。

キャリア成熟ないし職業的成熟に関する過去の研究は、主として心理学的アプローチによってなされてきた。また、その多くは、調査データのクロス分析を手がかりに推論が進められてきたといえる。

キャリア成熟には、いくつかの要因が多元的に影響を及ぼし合っていると考えられる。それらの構成要因は、個人のキャリア成熟に関し、促進的あるいは抑制的に作用し、個人は、それらの要因の影響下にキャリア (進路や職業) に関する見方・考え方を成熟させる。

＜研究の目的＞

本研究の目的は、児童のキャリア成熟を促進あるいは抑制する要因群の解明である。キャリア成熟の規定要因の分析においては、要因群の包括的解明が必要である。本研究では、児童のキャリア成熟に対する相対的影響力を

＜研究の方法＞

1. 調査の対象者・時期

愛知県内の公立小学校 (4校) の児童 4～6 年生とその親、総計 607 名。但し、有効回答票のみ。

調査の時期は、昭和52年7月である。

2. キャリア成熟尺度の構成とその測定

本研究で用いるキャリア成熟尺度は、次の3つの下位尺度より構成されている。

(A) キャリア自律度 (質問番号 1～5)

キャリア成熟している児童は、キャリアについて、自律 (主体) 的であり、他人に依存しない。

(P) キャリア計画度 (質問番号 6～10)

キャリア成熟している児童は、キャリアについて、長期にわたる時間展望があり、キャリアの計画をもっている。

(I) キャリア関心度 (質問番号 11～15)

キャリア成熟している児童は、キャリアについて、積極的な関心をもっている。
〔キャリア成熟の測定〕

これらの質問には、「はい」、「いいえ」、「どちらともいえない」のいずれかに回答させる。採点は、スコアのキーに一致したものには2点、一致しないものには0点、「どちらともいえない」には1点を与えた。下位尺度ごとにスコア (理論的には各尺度 0～10 点に分布) を求め、さらにトータル・スコア (理論的には 0～30 点に分布) を算出して研究に使用した。

3. 分析に採用する要因の選択(説明変数)

児童のキャリア成熟には、いくつかの要因が、多元的に影響を及ぼし合っていると考えられる。本研究では、キャリア成熟に関する要因として、次のものを採用する。

〔社会学的要因〕

・職業階層(父)

(1)ホワイトカラー, (2)専門・管理, (3)ブルーカラー, (4)自営, (5)農業, の5カテゴリー

・学歴階層(父) } (1)初等, (2)中等, (3)

・学歴階層(母) } 高等, の3カテゴリー

・所属学校

〔心理学的要因〕

・個人的労働観(児童) } (1)社会的貢献

・個人的労働観(父) } (2)経済

・個人的労働観(母) } (3)自己実現

(4)社会的地位・名声, の4カテゴリー

		社 会			
目的	(1)社会的 貢獻	(4)社会的地位・名声	手段		
	(3)自己 實現	(2)經濟			
		個 人			

・希望学歴(児童)

(1)中等学歴, (2)高等学歴, (3)わからない
の3カテゴリー

・父親の仕事内容についての理解度

(1)よく知っている, (2)だいたい知っている, (3)知らない, の3カテゴリー

・しつけ(児童の評価による)

(1)勉強型, (2)労働型, (3)自主性尊重型,
(4)放任型, の4カテゴリー

〔生活時間〕

・勉強の時間 } (1)0～1時間
・遊びの時間 } (2)1～2時間
・テレビの視聴時間 } (3)2時間以上
の3カテゴリー

・お午伝いの時間

(1)0分, (2)0～30分(0は含まない), (3)30分
以上, の3カテゴリー

〔親からのキャリア情報の伝達度〕

・労働の意義 } (1)よく話す, (2)ときど
・学歴の必要性 } き話す, (3)話さない,
・子どもの進路 } の3カテゴリー

〔個人特性的要因〕

・性

・学年

・学業の成績(児童の主観的評価による)
国・算・社・理の各教科の成績について、5段階の自己評定をさせ、4教科のトータル・スコアを算出した。さらに中央値をめやすにして、(1)下位階層(スコア 4～12), (2)上位階層(スコア 13～20), の2カテゴリーに分割した。

4. 分析の技法

本研究では、キャリア成熟を被説明変数とし、上記の要因群(20)を説明変数にして、要因分析を行う。説明変数の多くは、質的なものであり、通常の重回帰分析は使用できない。そこで、質的データをも処理できる数量化理論第I類を分析の技法として使用する。

<結果>

当日、資料配布。